

チリ 品種の更新で高品質なブルーベリーのシーズンを迎える

[FreshFruitPortal](#) 2025年10月28日

チリのブルーベリー産業には明確な目標があった。それは、競争の激しいベリー市場において、品質が安定したブルーベリーの供給体制を構築することである。この目標を達成するため、**業界は品種の更新という道を選択した**。Frutas de Chile(チリ果実輸出業者協会)ブルーベリー委員会の技術マネージャーであるフリア・ピント氏は、現在では新しいブルーベリー品種の栽培が進み、それらが実を結び始めたことで、「チリのブルーベリー産業は回復と成熟の明確な兆しを見せている」と述べた。(以下「」は同氏の話)

今シーズン、同委員会は昨シーズン比で微増の約9万1,500トンの出荷を見込んでいる。しかし、より重要な数値は、品質、果肉の硬さ、果実の大きさ、風味に重点を置いた新しい品種の出荷量が67%増加する一方、従来品種は17%減少すると見込まれることである。その結果、新しい品種の割合は昨シーズンの21%から**総輸出量の35%**に増加する。9万トンのうち、約3万3千トンが新しい品種によるものである。

「総量ではなく、品質と生産性を重視している。我々が強調したいのは、**より良好な状態の果実を供給するより近代的な産業への具体的な転換**である。」

品種の転換が現実に チリの生産者らは約8年前に品種の更新に着手し、現在ではその成果が圃場で目に見える形となって現れている。ピント氏によると、多くの生産者が従来品種を冷凍加工用に転用し、様々な遺伝系統の**クラブ品種やロイヤリティ品種等**の保護された新品種への投資を進めている。

「現在の生産者は、大学、苗木業者、遺伝学者と共同で実施された検証作業のおかげで、より多くの手段とより高い確実性を得ている。」

また、栽培面積が調整されたことも重要な要素である。チリ農業研究政策局の公式記録では3万5千エーカー以上とされているが、同委員会は最近の植栽と品種更新を踏まえ、**総栽培面積はほぼ3万9千エーカーに近い**と推計しており、生産効率に重点が置かれていると見ている。(1エーカー=約0.405ヘクタール)

「重要なことは、地域に適応し、耐性があり、プレミアムな果実を生産できる品種を選定し、栽培面積を隅々まで最大限に活用することである。」

技術的な取組みと将来の見通し ピント氏は、同委員会が主導した技術的取組みの成功を強調している。委員会は当初から**品種更新の圃場での検証に注力し**、また農学的性能のモニタリングやチリ大学の収穫後処理研究センターとの協力による収穫後品質の評価にも力を入れてきた。

「圃場から消費者までを一貫して捉えるこの統合的アプローチにより、生産者は統計的・技術的根拠に支えられた情報に基づく意思決定が可能となった。」

今後、委員会は品種開発企業や苗木業者の支援を受けながら、**新品種のモニタリングに引き続き力を入れる**予定である。「病虫害管理、水資源や気候に関連した管理といった、ますます厳しくなる世界的環境の下で重要となる分野においても研究を推進していく。技術移転は今後も中心的な取組みである。」

商業的戦略 商業的取組みに関してピント氏は、同委員会がフルーツロジスティカ(ベルリン)、アジアフルーツロジスティカ(香港)、フルーツアトラクション(マドリッド)、IFPA農産物・花卉展示会(米国)等の**国際展示会に積極的に参加**していることを挙げた。また、韓国、ブラジル等の市場の強化にも取り組んでいる。

「フィリピンやベトナムなど、**新たな輸出先の開拓**にも取り組んでおり、輸入プロトコルの検証を行う検疫官が近く到着する予定である。」

今シーズン、同委員会は中南米地域での活動も強化し、ブラジル、アルゼンチン及びチリ国内でブルーベリー消費促進のための販促事業や活動を展開する。「チリが高品質な果実を生産できるだけでなく、自らを再構築し、他国産の果実と同等の競争力を見事に回復したことを世界に示している。」

課題とチャンス 業界の課題について、技術マネージャーである同氏は、特に異常気象、新たな病害、より厳格な衛生基準といった要因に対応するため、**品質の維持と向上**を重視していると述べた。

また、競争力維持のための戦略的要件、すなわち物流効率を確保することと、**ミバエの非発生国としてのチリの地位を維持することも極めて重要**である。

今年の出荷シーズンは特に北部地域では既に始まっているが、非常に良好な状態の果実を韓国向けに出荷しており、チリのブルーベリー産業は将来に対して楽観的な見通しを持っている。

「我々には遺伝資源、気候、管理技術がある。今重要なのは、収穫から収穫後処理まで、すべてを適切に実行することである。今や、**失敗の余地は存在しない。**」

執筆者：マカレーナ・ブラボ